ぽけっとすとーりー　～小さな国の、小さな小さな物語～

　ジャックに見つかった時の、二人の動きは早かった。

　といっても、ただジャックから距離をとっただけなのだが。

　しかしそのお陰で――

「……」

「……うげぇ」

　雅也が黙りこくる隣で、六塚は呻き声を上げる。先程まで二人がいた場所に、今は大人一人分程の大きさのクレーターが出来ていたのだ。そしてクレーターの中心にはガブリアスが膝をついている。

　まるでこの光景が現実では無いかのような目をする二人に向けて、ジャックはゆっくりと右腕を伸ばした。

「……いけ」

　指示の声が発せられた瞬間、ガブリアスの姿が消える。気が付けば雅也と六塚の視界は、空を写し出していた。

　勢いよく地面に叩きつけられて、彼等はようやく、自分達が吹っ飛ばされたのだということを知る。二人並んで地面に倒れた中、雅也が上半身を何とか起こすと、クレーターの数が一つ増えていた。どうやら直撃を受けたわけではなく、クレーターが出来た時の衝撃で吹っ飛んだようだ。

「げ……げふぉぅ……」

「む……六塚さん……大丈夫ですか？」

　六塚は今の攻撃で呼吸器官がやられたのか、変な音を立てて咳き込んでいる。ヤバイ、と雅也は思った。素人目の雅也から見ても、早く治療をしなければやばそうだと感じる程だったからだ。

　さっきのハピナスを出せれば何とかなりそうだったが、ジャックが近くにいてはハピナスをボールから出すのは到底無理だろう。

　かといって、今の自分にジャックを引きつけておけるだけの実力は無いことなど、雅也は分かっている。

　どうすればいいのか思考がまとまらず、ただ苦しんでいる六塚を眺めていた雅也。

「……抵抗しない方が、痛くないよ」

だが気が付けば、ジャックとガブリアスがすぐそばに立っていた。

二人を交互に見つめるジャックのその目は、完全に捕食者のソレだ。

その瞳に、雅也は自分自身が写っているのを見た瞬間――

雅也は自分の顔から、サッと血の気が引いたのを感じた。同時に、腹の奥から恐怖に似たものが滲みでてきた。まるで金縛りにでもあったかのように、体が動かない。

圧倒的な威圧感に、その目に、彼はやられてしまったのだ。

いや、威圧感はジャックに近づいた時からずっと感じていた。だが、今までは平気だったのだ。というよりも、我慢出来ていた、という方が正しいか。

にも関わらず、今は耐えることが出来なくなっていた。

人間が本来向けられるはずの無い目を向けられている、というのも、ジャックに耐えられなくなった理由の一つではある。

だが雅也がこうなってしまった一番大きな訳は、こうして近くに立っていることを認識して初めて、自分とジャックには決して超えることの出来ない壁が存在することを知ったからだった。

以前見たはずなのに、目で追うことの出来ないスピード。そこから繰り出される攻撃の威力。

何より、ジャックは未だにガブリアスに技の指示を出していないことが、自分との間にある壁の高さがどれほどのものであるかを感じさせていた。

「さあ……これで終わりにしようか」

　後ずさることも出来ない雅也に、ジャックは再び腕を向ける。その声は、どこか面白がっているようにも聞こえる。

　だが。

「……ガブリアス」

　このジャックが呟きには、全くと言っていい程、感情が無かった。平坦と、淡々としていた。

　その瞬間、雅也の横から、何かが衝突したかのような衝撃が襲う。

　一瞬、雅也はこれがガブリアスの攻撃だと思っていた。思っていた程痛くは無いな。そう思っていたのだ。

　だがすぐに、その考えが違っていたということを知る。

　無理矢理動かされたことにより、やっと金縛りが解け、雅也は吹っ飛ばされた方と反対側を見る。

　否、意図せず見えてしまった、と言うべきか。

「……え？」

　何がなんだか分からず、ようやく出てきた声は、まるで他人のようなものに雅也は感じていた。

　攻撃したはずのガブリアスは、右腕を振り下ろしたかのような格好で固まっている。

「……」

　ジャックでさえ、声は出さず、顔色一つ変えずとも、少なからず驚いているようだった。

　赤い液体が空中に舞うその様子を、雅也はそれがまるでスローモーションであるかのように見ていた。大量のそれは、弧を描いて地面へと注がれていく。

　いや『注がれている』と言うほど、量はなかっただろう。

　だが雅也にとってはどうでも良かった。この状況の中、ようやく彼が『自分』というものを取り戻した瞬間だったからだ。

　驚いた時のジェスチャーで、六塚は、胸のあるあたりからその赤い液体を勢いよく噴出させていた。